

学校法人 仙台育英学園 秀光中等教育学校

二〇一八年度 第一次仙台・山形選抜試験

国語

(第一問～第四問)

注意

- ・試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないこと。
- ・この問題冊子は十一ページあります。
- ・答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

第一問 次の問いに答えなさい。

問一 次の——線の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 美しい景色を見る。
- ② 庭に雑草が生える。
- ③ 手ぶくろを編む。

問二 次の——線のカタカナを漢字になおしなさい。

- ① 荷物をハコぶ。
- ② チョウカンがポストに届く。
- ③ キュウキュウシャが出動する。

問三 次の——線は同音異義語です。カタカナを漢字になおしなさい。

- ① カンゲキを趣味とする。
 - ② 旅行することイガイ、楽しみがない。
 - ③ 身長がノびる。
- 試合時間がノびる。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくは猫が好きで、ずっと飼っている。猫たちはどのように生きているか、なぜそういう生き方か。見ていて飽きない。

そういう小さな日常の感覚と、学問として環境や生態といった大きな自然のシステムを研究することは、一見関係ないように見えて、実は同じ地平でつながっている。

しかし最近では、調べてみれば猫などの動物を通じて環境を知ろうというような研究や教育のアプローチが盛んだ。

それでいいのだろうか。大事なことはまず、猫はどんな動物か、犬とどう違うかを具体的に知ることではないだろうか。今の生態学には a という考えが入りすぎているのではないかと思っている。

猫の生態を知るために、猫そのものを調べるのではなく、猫がどういう環境を持っているか調べましようというのは、話の順番が違うのではないか。

環境にしろ生態にしろ、相手にしているのは漠然とした正体のわからないものだ。学問とは本来、そういう大きな疑問の、まずどこから手をつければいいのかを考えるもので、猫は、少しでも具体的にわかるところから疑問を解いてみようとするひとつの事例にすぎない。

部分がわかったからといって全体がわかったことにはならないということに、研究者はもっと注意するほうがいいので

はないだろうか。① 学問の本質と目の前のテーマとの関係を、はつきり知っておくことが大切だと思う。

(中略)

一九六四年の夏、フランスのブルターニュで、恩師、パリ大学のボードワン先生に連れられ、海の底に棲む② エポフィルスという昆虫を見に行ったときのことを、よく覚えていいる。

潮が引くのを追いかけて、沖に二、三キロ歩いただろうか。満潮になれば二十メートルの深さに沈む③ 岩場の割れ目に、エポフィルスはいた。

命がけで見に行った。時間を計って、潮が満ちてきたら急いで戻った。

海が戻る水の流れは川のような速さだった。そんな危険を冒すのは、ある意味ばからしいことかもしれない。だが、つくづくいきもの④ というのは大したことをやっていると実感した。

そういう虫がいて、人間が知らないうちに、ちゃんと動いている。海の底の有機物をエサにしている。⑤ そればかり食っているやつも、関係ないやつもいる。朝食うやつもいる。夜食うやつもいる。でも朝食うなら、その時間に海が引かなければ人間には見ることができない。

そんなふうには、この海にはほかに、ぼくらの想像もつかない変ないきものがたくさんいるのだろう。そう思った。

また、ぼくは昔からガ⑥ という虫が好きだ。そもそも、なぜ

昼間飛ばないで夜飛ぶのだろうというところに興味がある。

昼間飛んだらいいじゃないか。暗いと敵がいなくて安全だというが、夜に出てきてエサを探す敵もいる。暗ければ安全とは決していえないだろう。

b、昼間飛ぶガもいる。それは夜飛ぶガの苦勞はしていないはずだ。それでも夜飛ぶなら、昼間飛ぶよりどこがいいのだろう、などと考えているとますますなぜ夜飛ぶのか、わからなくなってくる。

それぞれに、それぞれの生き方があるのだ、といういいかげんな答えしか残らない。

それなりに苦勞しているんだ、としかいいようがない。

c、それなりに、どういう苦勞をしているのだろうということ、いろいろ考えてみるのがおもしろい。それは哲学的な思考実験に似ている。

エポフィルスにせよ、ガにせよ、苦勞するには苦勞するだけの原因があり、仕組みがある。それは何かということを探るのだ。

たとえば節足動物は、なぜ節足動物になってしまったか、ということから考える。たまたま祖先がそうだったから、彼らは体節を連ねる外骨格の動物になっていった。

すると体の構造上、頭の中を食道が通り抜けることになり、脳を発達させると食道にしわ寄せがいくようになった。ではどうしたらいいか。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

樹液や体液、血液といった液状のエサを摂ることにした。それが、その形で何とか生き延びる方法だった。節足動物といういきものは、そういう苦勞をしている。

動物学では、現在の動物の形が必ずしも最善とは考えない。そうならざるをえない原因があり、その形で何とか生きているのだと考える。

なぜそういう格好かっこうをして生きていいのか、その結果、どういう生き方をしているのか。そういった根本の問題を追究するのが動物学という学問なのだと思う。

いろいろないきものを見ていくと、こんな生き方もできるんだなあ、そのためにはこういう仕組みがあって、こういう苦勞があるのか、なるほど、それでやっと生きていられるのか、ということが、それぞれにわかる。

わかってみるとかんげきする。その形でしか生きていけない理由を、たくさん知れば知るほど感心する。

④ そのかんげきは、原始的といわれるクラゲのような腔腸動物でも、高等といわれるほ乳類でもまったく同じだ。

このごろ、よく、生物多様性はなぜ大事なのかと聞かれる。ぼくは、簡単に説明するときはこんなふうにいる。

生態系の豊かさが失われると人間の食べものもなくなります。食べものも、もとは全部いきもので、人間がそれを一から作れるわけではないのですから、いろんなものがいなければいけないのです、と。

ただそれは少し説明を省略したい方で、ほんとうは、あ

らゆるいきものにはそれぞれに生きる理由があるからだと思っている。

理由がわかって何の役に立つ、といわれれば、何の役にも立ちませんよ、というほかない。しかし役に立てるためだったら、こんな格好をしていないほうがいいというものがたくさんある。

人間も、今こういう格好をしているが、それが優れた形かどうかはわからない。それでも生きていけるといふ説明はつくけれども。

だからこそ動物学では、海の底のいきものも人間も、どちらが進化していてどちらが上、という発想をしない。

いろいろないきものの生き方をたくさん勉強すると思ふ。ぼくはそれでとてもおもしろかったし、そうすることで、不思議に広く深く、静かなものが見方ができるようになるだろう。

いきものは全部、いろいろあるんだな、あっていいんだな、ということになる。つまりそれが、生物多様性ということなのだと思ふ。

(日高敏隆「世界を、こんなふうに見てごらん」)

注1 有機物……生命があり生活しているもの。

注2 哲学……世界や人生、あらゆる物事がどのようにして成り立っているかを追求する学問。

問一

□ a、cに当てはまる語句についてaは本文中から漢字二字で書き抜き、b、cは次のア、オから選び、記号で答えなさい。

- ア たとえば
- イ 実際に
- ウ そして
- エ しかし
- オ 具体的に

問二

——線①「学問の本質」とはどういうものですか。本文中から二十八字で書き抜きなさい。

問三

——線A、Bの意味として最もふさわしいものを次のア、エから選び、記号で答えなさい。

A 大したこと

- ア すばらしいこと
- イ 科学的なこと
- ウ 規則的なこと
- エ 大ざっぱなこと

B 根本

- ア 根拠こんきよになるもの
- イ 勝手な思い込み
- ウ 物事の大本と
- エ 証明できること

問四

——線②「エポフィルス」——線③「ガ」の具体例から、筆者はどのようなことを述べようとしたのですか。「〜ということ」に続くように、本文中から二十一字で書き抜きなさい。

問五

——線④「そのかんげき」とはどのようなことについての「かんげき」ですか。その内容を本文中から探し、最初と最後の五字を書き抜きなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

問六

——線⑤「それが、生物多様性」とはどういうことだと筆者は述べていますか。本文に即して説明しなさい。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一

お花畑から、大きな虫が一ぴき、ぶうんと空にのぼりはじめました。

からだが重いのか、ゆっくりのぼりはじめました。

地面から一メートルぐらいのぼると、横に飛びはじめました。やはり、からだが重いので、ゆっくりいきます。うまやの角かどの方へ、のろのろといきます。

見ていた小さい太郎は、縁側えんがわからとびおりました。そして、はだしのまま、ふるいを持って追っかけていきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる草の土手どての上で、虫をふせました。

とってみると、かぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫とった。」

と、小さい太郎はいいました。けれど、だれも、なんともこたえませんでした。小さい太郎は、兄弟がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっち①ということは、こんなとき、たいへんつまらないと思います。

小さい太郎は、縁側にもどってきました。そしておばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫とった。」

と、見せました。

縁側にすわって、いねむりしていたおばあさんは、目をあいてかぶと虫を見ると、
「^{注1}なんだ、がにかや。」

といって、また目をとじてしまいました。

「ちがう、かぶと虫だ。」

と、小さい太郎は、口を **I** いましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうががにだろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにゃむにゃといって、ふたたび目をひらこうと
しませんでした。

小さい太郎は、おばあさんのひざから糸切れをとって、かぶと虫のうしろの足をしばりました。そして、縁板えんいたの上を歩かせました。

かぶと虫は、牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、前へ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きつと、かぶと虫には、おもしろい遊び方があるのです。だれか、きつとそれを知っているのです。

二

そこで、小さい太郎は、大頭に麦わらぼうしをかぶり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、門口かどぐちを出ていきました。

昼は、たいそうしずかで、どこか注2でむしろをはたく音がし

ているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、くわ畑の中の金平ちゃんの家へいききました。金平ちゃんの家には、しちめんちょうを二わかっていて、どうかすると、庭に出してあることがあります。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいっていかないで、いけがきのこちらから中をのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん。」

と、小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったからです。^②しちめんちょうにまで、聞こえなくてもよかったです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎は、ななどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとう、うちの中から、

「金平はのオ。」

と、返事がしてきました。金平ちゃんのおとうさんのねむそうな声でした。

「金平は、よんべから腹はらがいとうてのオ、ねておるのので、きょうはいっしょに遊べんぜエ。」

「ふっん。」

と、聞こえないくらいかすかに鼻の中でいって、小さい太郎はいけがきをはなれました。

ちよっとがっかりしました。

でも、またあしたになって、金平ちゃんのおなががおれ
ば、いっしょに遊べるからいいと思いました。

三

こんどは、小さい太郎は、ひとつ年上の恭一君きょういちの家に行くことにしました。

恭一君の家は、小さい百姓家ひゃくしょうやでしたが、まわりに、松や、つばきや、かきや、とちなど、いろんな木がいっぱいありました。恭一君は木のぼりがじょうずで、よくその木にのぼっていて、うかうかと、知らずに下を通ったりすると、つばきの実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことがあります。

また、木にのぼっていかないときでも、恭一君はよく、ものかげや、うしろから、わっといっぴくくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくると、もうゆだん③ができません。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そりそりと進んでいきます。

ところがきょうは、どの木にも恭一君はのぼっていません。どこからも、わっといっぴくってあらわれてきません。

「恭一はな。」

と、にわとりえさに餌をやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

「ちょっとわけがあつてな、^{注3}三河の親類へきのう、あずけたがな。」

「ふうん。」

と、小さい太郎は、聞こえるか聞こえないくらいに、鼻の中でいいました。なんとということでしょう。なかのよかった恭一君が、海のむこうの三河のある村に、もらわれてしまつたというのです。

「それで、もう、もどってきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はきました。

「そや、また、^④いつかくるだらあずに。」

「いつ？」

「ぼんや正月にや、くるだらあずに。」

「ほんとだねお婆さん、ぼんと正月にやもどってくるね。」

小さい太郎は、望みをうしませんでした。ぼんにはまた、恭一君と遊べるのです。正月にも。

四

かぶと虫を持った小さい太郎は、こんどは細い坂道をのぼって、大きい通りの方へ出ていきました。

^{注4}車大工さんの家は、大きい通りにそってありました。その家の安雄^{やすお}さんは、もう^{注5}青年学校にいつているような大きい人です。けれど、いつも、小さい太郎たちのよい友だちでした。じんとりをするときでも、かくれんぼをするときでも、

いっしょに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちから、とくべつに尊敬されていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくるとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、パイと鳴ることができたからです。また安雄さんは、どんなつまらないものでも、ちょっと細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくにつれて、小さい太郎の胸は、わくわくしてきました。安雄さんが **A** でどんなおもしろいことを考え出してくれるかと、思ったからです。

ちょうど、小さい太郎のあごのところまであるこうしに、首だけのせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみのといしで、かんなの刃^はをといでいました。よく見るときようは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに入力を入れるんじゃねえといったら、わからんやつだな。」

と、おじさんがぶつくさいいました。安雄さんは、刃のとぎ方をおじさんにおそわっているらしいのです。顔をまっかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎の方を、いつまで待っても見てくれません。

とうとう、小さい太郎は **II** をきらして、

「安さん、安さん。」

と、小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかったのです。

しかし、こんなせまいところでは、そういうわけにはいきません。おじさんが聞きとがめました。おじさんは、いつもは子どもにむだぐちなんかきいてくれるいい人ですが、きょうは、なにかほかのことではらをたてていたとみえて、太いまゆねをびくびくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう、きょうから、一人まえのおとなになったでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや。」

と、つっぱなすようにいいました。

すると安雄さんが、小さい太郎の方を見て、しかたがないように、かすかにわらいました。そしてまたすぐ、^⑤じぶんの手先に熱心な目をむけました。

虫がえだから落ちるように、力なく、小さい太郎はこうしからはなれました。

そして、ぶらぶらと歩いていきました。

五

小さい太郎の胸むねに、深い悲しみがわきあがりました。

(中略)

安雄さんは、遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎は、べつの世界にいるのです。いっしょに遊ぶことはないのです。

小さい太郎の胸には、悲しみが空のようにひろく、深く、うつろにひろがりました。

^⑥ある悲しみは、なくことができます。ないて消すことができます。

しかし、ある悲しみはなくできません。ないたって、どうしたって、消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しみは、なくこのできない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上にひとつきり、ぽかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものを見るように、まゆをすこししかめながら、長いあいだ見ただけでした。かぶと虫がいつか指からすりぬけて、にげてしまったのにも気づかないで――。

(新美南吉「童話集 どんぎつね 最後の胡弓ひき

ほか十四編」より。)

注1 「なんだ、がにかや。」……「なんだ、かになのか」ということ。

注2 むしろ……わらをひらく編んだもの。

注3 三河……愛知県南部の古い呼び名。小さい太郎の土地とは三河湾わをはさんだ向こう側の土地になる。

注4 車大工……木製の車を製作した大工。

注5 青年学校……昭和二十二年以前、六年から九年の学業を修了した後に入学した勤労青少年のための学校。昭和十年につくられた。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問一

——線①「こんなとき」とはどんなときですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 人びとが昼寝をしている静かでないとき
- イ 得意になって自慢じまんしたいと思っているとき
- ウ 誰かといっしょに遊びたいと思っているとき
- エ もっとおもしろいことをしたいと不満なとき

問二

——線②「しちめんちょうにまで、聞こえなくてもよかったからです」とありますが、それはどんな理由からですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア しちめんちょうは今いるかどうかここからは見えないから。
- イ しちめんちょうが金平ちゃんと遊ぶのにはじまになるから。
- ウ しちめんちょうが声に気づいて出てくるのはいやだったから。
- エ しちめんちょうも寝ている時間で起こすのはわるかったから。

問三

——線③「ゆだんができない」とは小さい太郎のどんな気持ちを表していますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 恭一君はいつもおもしろいことをするので今日は何をするのかとわくわくしてくる気持ち。
- イ 恭一君は木に隠れておどかしてくるので自分も隠れてやりかえしてやろうとする気持ち。
- ウ 恭一君は木に隠れたりしていないふりをするので気をつけて見つけようとする気持ち。
- エ 恭一君はいつもおどかしてくるので用心してびっくりしないようにしようとする気持ち。

問四

——線④「いつかくるだらあずに」とありますが、この方言はだいたいどういうことを言っていますか。答えなさい。

問五

□ Aに入れるふさわしい一語を本文中から書き抜きなさい。

問六

□ I、IIに入れる語として最もふさわしいものをそれぞれ次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- I
- ア あけたまま
 - イ まるめて
 - ウ とがらして
 - エ つきだして

- II
- ア がまん
 - イ 声
 - ウ いき
 - エ しびれ

問七

線⑤ 「じぶんの手先に熱心な目をむけました」とありますが、このとき安雄さんはどのような気持ちでしたか。その説明として最もふさわしいものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 父親のあとをついで仕事をするのは仕方がないこととどとにかくできるだけのことはやろうとしている。
- イ 父親のあとをついで仕事するのは仕方がないことでも小さい太郎とも少しは遊びたいと思っている。

問八

線⑥ 「ある悲しみは、なくことができます。ないて消すことができます」とありますが、恭一君のことでは、泣く一歩手前のようなだった小さい太郎は、どのように考えて悲しみを消すことができましたか。小さい太郎の考えを説明している部分を本文中から二十五字以内で書き抜きなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

- ウ 父親にこっぴどくしかられていやになっていたときに小さい太郎が来てくれたのでほっとしている。
- エ 父親にこっぴどくしかられたがいっしょうけんめいやって許してもらって遊びに行こうと思っている。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

登竜門^{とうりゅうもん}とは立身出世^{りっしんしゅっせ}のための狭き門^{せま}のことだ。黄河の急流、竜門を跳び越えたコイは竜になるという中国古代の伝説が基^{もと}になっている。①伝説の背景には水面を跳ねるコイの習性がある。

中国原産のコイ科のハクレンは戦時中、利根川に放流され、定着した。産卵場所がある埼玉県久喜市^{くき}では六月から七月にかけて体長一メートル前後のハクレンが次々にジャンプする光景が見られる。

日本では生態系^{せい}への影響^{えいぎょう}は軽微^{けいび}とされるが、米国ではジャンプする新顔^{しんげん}の魚^{いし}に懸念^{けんねん}が高まっている。一九七〇年代に養殖地^{ようじち}の水質改善のために導入されたハクレンなど中国原産の「アジアン・カープ」が洪水^{こうずい}などでミシシッピ川に流入し、増殖^{ぞうじく}しているのだ。

コイ科の魚は生命力が強い。米国では食用の習慣もないため、元々いた魚^{いし}を駆逐^{くちく}し、生態系を崩^{くず}している。五大湖に流入すれば、壊滅^{かいめつ}的な打撃^{だげき}になると対策が進められている。

外来生物への対応は世界共通の課題だ。日本でもブラックバスやカミツキガメなどが問題視されてきたが、今度はヒアリだ。中国から神戸に着いた貨物船で見つかった。南米原産で三十年代に米国南部に移入し、生息地域を広げた。二十世紀になって台湾や中国南部でも繁殖^{はんしよく}が確認された。

刺^さされればやけどのような痛みを感じ、死亡例もある。洪水

水時には集団でいかだのように水面を漂^{ただよ}うというからコイに劣^{おと}らず生命力が強い。学名には「無敵」の意味もある。定着されては大変だ。どう水際で阻止^{そし}するか。手ごわい新顔の登場に心したい。

(毎日新聞「余録」二〇一七年六月十九日掲載)

注1 立身出世……社会的に高い地位について有名になること。

注2 軽微……ほんのすこし。わずか。

注3 懸念……心配。

注4 駆逐……じゃまするものを追い払うこと。

問一 線①「伝説の背景」とありますが、どのような伝説ですか。「伝説」と続くように、本文中から十八字以上、二十三字以内で抜き出さない。

問二 線②「新顔の魚」とありますが、どのような魚のことですか。かんとんに書かれている部分を本文中から書き抜きなさい。

問三 この文章は、自然環境について述べられています。あなたが身近に感じる自然環境の変化と、それに対するあなた自身の今後の生活の取り組みについて、具体的に書きなさい。